

飛鳥資料館 写真教室の開催

飛鳥資料館の写真コンテストは、今夏、5回目を迎え、『飛鳥の薨』をテーマに、75名の方から過去最多213点の応募をいただきました。毎回、写真コンテストでは、総評や表彰式での講評を通して作品のレベルアップにつながるようなコメントをお伝えしています。応募者からの「もっと詳しく聞きたい」という声にお応えして、企画調整部写真室の職員を講師として、写真教室を初めて開催しました。

7月25日開催の第1回のテーマは「デジタル写真のパソコン仕上げ術」。まずは、写真の基礎知識として、画素数に惑わされないデジタルカメラの選びかた、デジタルカメラのデータ記録方式、正確な色を表現するための注意点、さらには、写真の構図について説明しました。もちろん、どのような作品に仕上げていくのも個人の自由な表現なのですが、写真としては正確な色味の再現をめざすことが基本です。奈良文化財研究所らしく、各地の発掘現場や出土品を撮影した写真を用いて、説明しました。

次に、実技のコーナーでは、パソコンで受講者が撮影した写真の色味やコントラストを調整して、表現がどのように変わるか試してみました。真っ黒だった影の部分から見えていなかった被写体が現れたり、花の色味がはっきりしたり、空が美しく見えたり……写真の仕上がりの変化に感心する受講者の姿が印象的でした。教室には質問が飛び交い、予定していた時間を過ぎても、皆さん熱心にパソコンと向き合っていました。

受講者からは、今後も写真教室を開催してほしい、もっと実技を受けたいといった感想が聞かれました。飛鳥資料館では、これからも、さまざまなイベントの開催を予定しています。どうぞご期待ください。

(飛鳥資料館 西田 紀子)



写真教室の会場の様子

出土木製品の一時保管環境改善の試み

遺跡から出土した木製品は、乾燥すると不可逆的な収縮、変形を生じてしまうため、保存処理がおこなわれるまで水の中に入れて一時的に保管されます。しかし、水中では微生物の活動によって、木製品が少しずつ分解されてしまいます。特に大型の木製品の保管に利用される屋外の水槽では、微生物が繁殖しやすいことから、木製品の劣化を軽減する方法の確立が大きな課題となっています。日本では各地で膨大な量の木製品が出土するため、高度な装置などを使わずに実施でき、かつ環境負荷が少ない方法であることが求められます。

微生物の多くは、水中に溶けている酸素を消費しながら木を分解しています。また、その活動は温度の上昇にともない活発になります。そこで、保存修復科学研究室では、処理前の木製品の保管環境を調べるため、一時保管をおこなっている屋外水槽内の酸素量と水温に関する調査を2013年7月から1年間実施しました。その結果、水中の酸素濃度は冬季では飽和状態に、反対に夏季ではおおむね低い濃度を維持することがあきらかとなりました。冬季は水温が低いために微生物の活動が緩慢になり、酸素の消費が抑制される一方で、夏季は微生物による消費が大幅に増大するためと考えられます。また、気温の変化や降雨の影響によって水が攪拌されると、一時的に酸素濃度が増加することもわかりました。

木製品の分解速度は、微生物の活動が活発な夏期でも水中の酸素が枯渇すると低下します。したがって、木製品の一時保管では、活動が活発となる夏季に、常に低い酸素濃度を維持することが好ましいため、降雨などによる一時的な酸素濃度の増加を抑制する方策を現在検討しています。

(埋蔵文化財センター 高妻 洋成)



出土木製品の保管用水槽